

IV 道徳 1年次の成果と課題

1 成果

(1) ホットシーティングを通して多様な道徳的価値に触れることで、これまでの自分やこれからの自分を見つめ直す子どもの姿

登場人物の気持ちを自分との関わりで考える活動は、より深く道徳的価値の意義について理解することに通じる。それは、相手の気持ちに寄り添う思考の基になったり、これからの自身の生き方の幅を広げてく道徳的価値観につながったりしていく。

「友情を支えるもの～友の命～」の実践では、「ピシアスが戻ってくる姿を見たとき、王様はどんなことを思っていたか」という学習問題に対して、王様の心の中を可能性のある限り出す場をとった。その際取り入れたのが、小グループで王様役に対し順番に質問をしていくホットシーティングの活動である。この活動をするに当たって留意したことは次の三つである。

①王様役は、質問に対して王様になりきった形で答える。

②質問は王様役以外の人達が順番にしていく。

③質問が浮かばない場合は、一度だけパスをしてもよい。

ホットシーティングの活動は、質問したり答えたりとの往復によって、登場人物の状況を理解する手助けになっていった。王様役へ投げかけた質問自体が【友情・信頼】【生命尊重】【約束】【勇気】といった多様な道徳的価値を内包していたことも大きな成果と言える。

ホットシーティングの活動を通して、道徳的価値に対する意識の違いについて、自分と比較しながら思考している子どもの姿がグループごとのボードにも表れていた。互いの応答を視覚的にも聴覚的にも観察しながら、その応答の妥当性を自分の道徳的価値観と向き合い、これまでの自分やこれからの自分を見つめ直す省察の姿につながっていった。

(2) 演劇的な手法を組み合わせることで生まれた「心のものさし」

「葛藤のトンネル」の活動では、『もし自分が王様なら、デモンの首を「切る」のか「切らない」のか』友達からの「心の声」を浴びながら「葛藤のトンネル」を歩く。その姿が、道徳的価値と真正面から向き合い本気で悩み思考する姿であった。「心の声」は、ホットシーティングの活動で出された王様との応答の中から選び直し、「葛藤のトンネル」を歩く王様役に対して囁かれた。王様役も「心の声」の役もホットシーティングの活動で出された多様な道徳的価値の理解を越え、自分と向き合い試行錯誤する姿であった。

友達や授業者から時折問いかけられるごとに静まりかえる時間があった。「自分の命より友達の命を大事にするその気持ちが分からない」「互いに考えていることが違っても友達と言えるのか」その問い掛けが、それまで表面的だったり曖昧だったりする思考に大きく揺さぶりをかけた。自我関与により表出した思考の根拠やその特徴を共有し合う中で、【友情・信頼】に対する新たな気付きが生まれる。子どもたちに「異なる考え方をしている、思い合う気持ちが同じなら分かり合える」という「心のものさし」が刻まれていった。自分の考えを多面的・多角的な視点で見つめ直す演劇的手法の活動を組み合わせることが、これまでの道徳的価値を捉え直すことにつながっていった。

2 課題 自分の納得した道徳的価値観を導く協働的な学びの在り方

これまで「優位性のランキング」「葛藤のトンネル」「ホットシーティング」の活動を単独で授業に取り入れながら進めてきた。今回、「ホットシーティング」と「葛藤のトンネル」を組み合わせる形で授業を構成することで、子どもの道徳的価値への理解や深まりと言う点で一つの成果は見えた。子どもに委ねた授業を念頭に置きながら、自分の思考が再構築されていくよさを核にした協働的な学びのスタイルを模索していきたい。